

公立小学校での国際バカロレアプログラムの実践における グローバル・コンピテンスの涵養に関する研究

—教科横断型授業「私たちはどのような場所と時代にいるのか」を事例として—

Research on the Development of Global Competence through International
Baccalaureate Program in Public Elementary School:
A Case Study of Cross-Curricular Topic 'Which Place and Era We Are in?'

瀬下岳*, 日下智志**

Gaku SESHIMO*, Satoshi KUSAKA**

*元高知県香美市立大宮小学校, **鳴門教育大学

*Former Omiya Elementary School, Kami City, Kochi Prefecture

**Naruto University of Education

要旨

The aim of this research was to identify the factors to contribute to the acquisition of global competence by the implementation of IB program in Grade 6. First, the commonalities between the global competence defined by the OECD and the objectives of the IB curriculum were extracted and discussed. Second, a lesson plan related to the extracted commonalities were developed and implemented. Third, the development of children's global competence was analysed. As a result, the following two points were found out. First, there are similarities between OECD global competence and the objectives of the IB program. Therefore, the implementation of IB program can foster the OECD global competence. Second, it is important to make a matter of personal concern in acquiring global competence. Furthermore, it was implied that the authentic information and examples facilitated it.

キーワード：グローバル・コンピテンス, 国際バカロレア, 教科横断型授業, 自分ごと化

1. はじめに

国際バカロレアプログラム（以下、IBプログラム）は、資質・能力（コンピテンシー）ベースの学習観をはじめ、時代の変化に適した新しい教育のあり方を示す役割が期待されている（日本教育新聞, 2017, 6098号）。IB教育と日本の教育政策の方向性は親和性が高く、両者共に、国際的な視野を持ち、将来（Society 5.0）の社会課題に対応するグローバル人材の育成を一つの柱としている。グローバル人材の育成に関し、経済協力開発機構（OECD）は、グローバル社会を生きるすべての子どもたちに不可欠な資質・能力として、グローバル・コンピテンスを規定し、2018

年のOECD生徒の学習到達度調査（PISA）において、それらに関する新たに調査項目を設定した。グローバル人材の育成を目指し、学校教育において子どもたちのグローバル・コンピテンスを育成することが、近年ますます重要となってきたといえる。実際の授業の在り方について、渡邊（2014）は、IBの導入が、OECDが推奨する動的汎用力を推進し、近代の学校に特徴的な教科毎に独立した知識体系と講義形式の教授法の変革を迫っていることを指摘している。他方で、グローバル・コンピテンス育成のための具体的方略に関する研究はまだ萌芽的であり、確固たる教育理論および方法は現在のところ存在せず、実践事例を蓄積していくことが望まれる分野である。IBプログラ

ムは、私立学校や特別プログラムを持つ公立学校に散発的に取り入れられていたが、グローバル化に対応する教育モデルとして各国の政府が教育改革に取り入れた事から、教育内容と方法からすると本来は馴染まない公立学校にも浸透していった(渡邊, 2014)。

本研究は、日本の公立小学校で唯一 IB プログラムを実践している高知県香美市の大宮小学校 6 年生の教科横断型授業「私たちはどのような場所と時代にいるのか」の実践を事例として、IB プログラムの実践におけるグローバル・コンピテンスの涵養について考察する。

2. 研究の目的および方法

本研究の目的は、6年生を対象に教科横断型で実施した「私たちはどのような場所と時代にいるのか」の授業実践を通して、児童のグローバル・コンピテンスの発達の様相について明らかにすることである。そのために、まず関連する先行研究の整理および検討を行う。次に、検討結果をもとにしてグローバル・コンピテンスの発達を目的とした授業を構想し、実践する。

さらに、各活動において記述式の課題を与え、児童のグローバル・コンピテンスの発達と関連する文章を抽出して分析することにより、児童のグローバル・コンピテンスの発達に関する考察を行う。

3. 先行研究の整理および検討

OECD が規定するグローバル・コンピテンスの定義および具体的な内容について整理し、IB プログラムとのそれらの整合性について考察する。

3.1. グローバル・コンピテンス

3.1.1. OECD が規定するグローバル・コンピテンス

OECD (2018) は、グローバル・コンピテンスとして、1) 地域的、世界的、そして異文化間の問題を検討する能力、2) 他者の視点と世界観を理解し認める能力、3) 異なる文化を持つ人々とオープンで適切で効果的な関わりを持つ能力、4) 共同体の幸福と持続可能な開発のために行動する能力、という 4 つの側面を挙げた(表 1)。グローバル・コンピテンスが求められている理由として、多様化する社会の中で、文化

表 1. OECD のグローバル・コンピテンスの定義

地域的、世界的、そして異文化間の問題を検討する能力	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 世界についての知識と批判的・論理的思考を組み合わせ、グローバルな問題について自らの意見を形成することができる。 ✓ グローバル・コンピテンスの高い生徒は、学校で獲得した学問的知識について考えたり、問いを立てたり、データや議論を分析したり、現象について説明したりして、地域的、世界的、文化的な問題について自らの考えを持つことができる。 ✓ メディアから発信されたメッセージについて批判的に分析し、そこから新しい内容を創り出すことができるという人物像を想定。
他者の視点と世界観を理解し認めることができる能力	<ul style="list-style-type: none"> ✓ グローバルな問題を複眼的視点で考える意欲や能力。 ✓ 違う文化の歴史や価値観やコミュニケーションスタイル、信念や慣習についての知識を獲得することで、自分たちとは大きく異なった世界観を持っていること、自らの物の見方や行動への文化的影響、そしてこの事への無自覚にも気づくことができる。 ✓ 異なる見解や世界観と向き合い、思い込みの原因やそれによって引き起こされてしまう結果について検討すれば、異なった人に対してステレオタイプや偏見、偽の直感的思考(ヒューリスティックス)を内面化させることなく、個人として見ていくことができる。
異なる文化を持つ人々とオープンで適切で効果的な関わりを持つ能力	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 異なる文化を持つ人に対し自分の行動やコミュニケーションを合わせるができる。 ✓ グローバル・コンピテンスの高い人物は、尊敬を払って会話をし、理解に努め、周辺化された人々を仲間に入れようと行動することができる ✓ オープンで、適切かつ効果的なコミュニケーションを取ることで 他者との違いを埋めていく能力。
共同体の幸福と持続可能な開発のために行動する能力	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 若者が社会で積極的かつ責任のある役割を果たし、地域社会とグローバル社会における異文化間の問題や状況に対応すべく、行動する。 ✓ 若者であっても、個人レベルや地域レベルの状況を超えて、より大きなグローバル規模の問題に対しても影響を与える可能性がある。 ✓ 情報に基づいて熟考し、自分の声を聴いてもらう機会をつくることができる。人間の尊厳が脅かされている友人のために立ち上がったたり、ソーシャル・メディアを使って難民について個人的意見を広めるといった行動を起こすことができる。 ✓ 自分が暮らしているコミュニティの生活状況を改善しようとするだけでなく、世界を、より正義に満ちて、平和で、開かれており、持続可能性あるものへと変えていくために行動していくことが想定されている。

出典：OECD (2018)。

的な認識と他者への尊重がこれまで以上に重要となっていることが挙げられる。また、コミュニティ（地域社会、地域、都市、近隣、学校）の違いを尊重することにより、地球市民として共に生きることが促進される（UNESCO, 2014）。また、グローバル化が進む労働市場に対応するためにも、グローバル・コンピテンスが求められている。国際協力機構（2014）によると、雇用主は、適応力があり、スキルや知識を新しい文脈で適用・移転できる人材を必要としている。子どもの頃からグローバル・コンピテンスを身につけさせることにより、多様な集団の中において適切な行動ができる可能性が高くなる。これは多くの仕事において重要な成功要因の一つとなるだろう。また、グローバル・コンピテンスに関する教育を実践することにより、国際的な問題を理解し、地球市民としての社会性を備えることができる（Cushner, 2008）。さらに、グローバル・コンピテンスを備えた子どもは、グローバルな問題に対する意識が向上し、思考モデルが変化することも報告されている（Boix Mansilla and Jackso, 2011）。以上より、グローバル・コンピテンスは、一部の特別な子どもが身につける限定的な能力の概念ではなく、これからの社会を生きていくすべての子どもたちにとって必要な普遍的な能力として捉える必要があり、教育において、上述の1)～4)の能力の涵養が求

められている。

3.1.2. IBプログラムにおけるグローバル・コンピテン

IBプログラムのミッションとして、「多文化に対する理解と尊敬を通じて、平和でより良い世界の実現のために貢献する、探究心、知識、そして思いやりのある若者」や、「ほかの人たちをその違いと共に理解し、自分と異なる人々にもそれぞれ理があることがわかる、行動的で、共感する心を持つ生涯 学習者」を育てることが掲げられている（国際バカロレア機構, 2016）。また、IBプログラムが掲げる目指すべき10の学習者像として、「探究する人」、「知識のある人」、「考える人」、「コミュニケーションができる人」、「信念をもつ人」、「心を開く人」、「思いやりのある人」、「挑戦する人」、「バランスのとれた人」、「振り返りができる人」を示している。IBの理念は全人教育にあり、目指す10の学習者像の中には、「コミュニケーションができる人」、「心を開く人」、「思いやりのある人」など、グローバル・コンピテンスに関連するものが複数含まれている（国際バカロレア機構, 2016）（表2）。Resnik（2008）は、IBの教育理念および教育内容は、グローバル企業の管理職として成功するために必要とされる能力や技術と高い親和性があることを指摘している。

表2. IBプログラムが掲げる目指すべき10の学習者像

探究する人	好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。
知識のある人	概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組みます。
考える人	複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。
コミュニケーションができる人	複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のもの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。
信念をもつ人	誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動します。自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。
心を開く人	自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見だし、その経験を糧に成長しようと努めます。
思いやりのある人	思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。
挑戦する人	不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探求します。挑戦と変化と機知に富んだ方法で快活に取り組めます。
バランスのとれた人	自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。
振り返りができる人	世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

出典：国際バカロレア機構（2016）。

3.2. OECD と IB プログラムのグローバル・コンピテンスにおける共通点

OECD が規定するグローバル・コンピテンスと IB プログラムが掲げる目指すべき 10 の学習者像を、本研究の主題であるグローバル・コンピテンスの視点から比較分析することにより、両者の共通点について考察する（表 3）。OECD の「他者の視点と世界観を理解し認めることができる能力」と IB カリキュラムの「バランスの取れた人」は、地球規模そして地域レベルの観点から物事を見たり考えたりする能力という点において一致する。また、OECD の「地域的、世界的、そして異文化間の問題を検討する能力」と IB カリキュラムの「考える人」は共に、世界が直面する問題に対し、知識と批判的・論理的思考を活用し、自らの意見を形成して問題解決に臨む姿勢を示している。さらに、他者のために積極的かつ責任のある役割を果たすという考え方を示している。OECD の「異なる文化を持つ人々とオープンで適切で効果的な関わりを持つ能力」と IB カリキュラムの「思いやりのある人」は、他者との関係に関するコンピテンスであり、両者共に、自分が生活する社会の中で、他者のために積極的かつ責任のある役割を果たすという考え方を示している。

4. 授業の構想

前節までの考察をふまえ、本研究では、OECD のグローバル・コンピテンスとの共通点である「バランスのとれた人」、「考える人」、「思いやりのある人」という 3 つに主眼を置いて授業を構想した。本単元の目的を、「グローバル化が進む現代社会において国を超えて互いの文化を尊重し、共生社会を実現していくうえで、必要なことについて考えることができるようになる。」と設定した。この目的を達成するために、本単元の探求テーマを、「私たちはどのような場所と時代にいるのか」とし、具体的な探求内容として、「場所と時代への適応、個人の歴史、家と旅、人類による

発見・探検・移住、地球規模そして地域レベルの観点から見た個人と文明の関係性と相互的な関連性についての実践」を設定した。また、IB プログラムでは、普遍的で汎用的な見方や考え方（概念）のことを「セントラルアイデア」と呼び、単元ごとにセントラルアイデアを設定している。本単元では、移民が主なテーマであるため、「世界の創造は人類の移動とともにある。」をセントラルアイデアとした。さらに、本単元の総括課題として、「現代社会が抱える移民問題についての意見文を作成する。」というパフォーマンス課題を与えることとした。

5. 授業実施

先節で述べた各活動の概要を示し、児童に与えた課題と回答例を示すことにより、授業実践を振り返る。また児童の意見を、本研究で焦点をあてるグローバル・コンピテンスの 3 つ、(A)他者の視点と世界観を理解し認めることができる能力、(B)地域的、世界的、そして異文化間の問題を検討する能力、(C)異なる文化を持つ人々とオープンで適切で効果的な関わりを持つ能力、に分類した。各回答例の文末にそれらを示す。

5.1. 様々な国の成立ちの探究（特徴）

(1) セントラルアイデア「世界の創造は人類の移動とともにある」に対するイメージの起草

模造紙の中央にセントラルアイデア「世界の創造は人類の移動とともにある」と記載し、初めてセントラルアイデアを読んだ時のイメージやどのように思ったかについて、児童の考えを付箋に記載させ、セントラルアイデアの回りに張らせた。

(児童の記載内容)

- 「移動」という言葉から伊能忠敬のように色々な場所の冒険をしていくイメージがあった。地図上で世界が創造されていく中で、そんなイメージがあった。(B)

表 3. OECD と IB の共通点

OECD	IB
他者の視点と世界観を理解し認めることができる能力	<u>バランスのとれた人</u> 人類による発見・探検・移住について、地球規模そして地域レベルの観点から見たり考えたりする。
地域的、世界的、そして異文化間の問題を検討する能力	<u>考える人</u> 複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用する。率先して理性的で倫理的な判断を下す。
異なる文化を持つ人々とオープンで適切で効果的な関わりを持つ能力	<u>思いやりのある人</u> 思いやりと共感、そして尊重の精神を示す。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動する。

筆者作成。

表4. 単元全体の活動の流れ

活動	具体的な内容
(1) 様々な国の成立の探究 (特徴)	国々を文化的 (人種, 文化, 宗教, 価値観など) に特徴づけることを通して, 各国の成立について考える. その際, 「なぜアフリカ大陸の国境は直線的なのか.」, 「中南米でスペイン語やポルトガル語が話されているのはどうしてか.」, 「いろんな国の国旗にイギリスの国旗が入っているのはどうしてなのか.」という発問を通して, 支配していた側と支配されていた側の国の成り立ちについて理解を深める.
(2) 人類の移住の背景の探求 (原因)	「なぜヨーロッパ人がアフリカ大陸や南米に移動したのか.」という発問を通して, 人が移動する理由には様々な背景があることへの理解を深める. また, ドミニカ共和国の日系移住者や高知県の国際交流員との交流を通して, 各々の移住した背景や思いを知り, 考えを深める. さらに, 日本で生活している外国人実習生や無国籍の方と共に暮らすにはどのようなことが大切かを考えることを通して, 人類が目指すべき未来について, 共生という視点から考える.
(3) 人類が目指すべき未来の探究 (責任)	移民問題は, 戦争および植民地支配に起因する. アンゴラ出身の方に, 自国の難民問題について語ってもらう場を設定する. さらに, 本単元全体で扱ってきた様々な課題における考えを振り返りながら, 人類が目指すべき未来について「共生」をテーマに考え, 意見文を作成する.

筆者作成.

-世界では戦争が頻繁に起きていてその原因のほとんどが土地の奪い合いなので戦争によって都市や地域の「移動」を想像しました. 戦争に敗北した側は土地が減り, 避難していくので「人類の移動」なのかと考えた. (B)

-人々が他の国へ行って, 支配したり支配されたりすることによって, 国と国とのまとまりが強くなり, 世界が成り立っているのだと思った. (B)

(2) 様々な国の成立の探求

国の成り立ちを, 人種, 文化, 宗教, 価値観などの文化的特徴から考えさせた. トピックとして, 「なぜアフリカ大陸の国境は直線的なのか.」「南米でスペイン語やポルトガル語が話されているのはどうしてか.」「いろんな国の国旗にイギリスの国旗が入っているのはどうしてなのか.」という問いを投げかけ, 支配していた側と支配されていた側の国の成り立ちについて理解を深めさせた.

まず, アフリカ大陸の地図を見せ, アンゴラ-ザンビア間の国境に着目させ, なぜ国境線が直線なのか, そもそも国境はどのように決めるのか考えさせた. 国境は, 自然的国境と人為的国境に分かれ, アフリカ大陸の国境が直線なのは, 人為的国境に起因していることを確認した. 次に, 南米の言語分布図を見せ, ブラジルがポルトガル語, それ以外の多くの国でスペイン語が話されている理由について考えさせた. そこで, ヨーロッパの各国が世界侵略を試みていた植民地時代の背景について確認した. 最後に, オーストラリア, ニュージーランド, フィジー, ツバル, 返還前の香港の国旗にイギリスの国旗が入っている理由を考えさせた. それぞれの国の言語もイギリスで話されている英語を母国語とし, 植民地であったことが起因していることを確認した.

(児童の記載内容)

-ニュージーランドやフィジーの国旗にイギリスの国旗が入っているのは, 昔それらの国はイギリスの植民地であり, イギリスの国王を国の象徴としていたからだと分かった. (B)

-アフリカの国境が直線になったのは列強国同士で自分の領土を広げようとして原住民や民族性, 文化を考慮せずに緯線や経線で地域を分けて国の範囲を決めたからと分かった. (B)

-植民地にされるとその国の文化や誇りが尊重されないのだから, 支配される国は苦しい思いをしただろう. なぜ列強国は, アフリカを植民地化したのかと疑問に思った. (B)

-ヨーロッパの列強国は大陸や国に移動し, 植民地支配をし, 国を「創造」していった. (A)(B)

-このようなことから私は, 支配される国は自分たちの文化を否定される上に支配する国の文化まで勝手に植え付けられて悔しいと思う. 今の時代はむしろ文化を尊重しあっているが, なにが人の考えを変えたのか疑問に思う. (A)(B)

5.2. 人類の移住の背景の探究 (原因)

(1) 人々が移動する背景

「なぜヨーロッパ人がアフリカ大陸や中南米に移動したのか.」という問いを投げかけ, 人々の移動には様々な背景があることへの理解を深めさせた. 具体的には, 大航海時代のコロンブスや渡来者等を通して, どのような理由で移動したのか考えると共に, 支配した側と支配された側の国々の特徴を確認した.

(児童の記載内容)

-ブラジルに日本の企業が進出した際に日系人がブラジルと日本企業をつなげる役をしました. そうすることでブラジルからの信頼を得た. (C)

-支配された国はアフリカ, 南アメリカ, アジアやオ

セアニアの国々である。資源はあったが技術がなくて宝の持ち腐れだった。支配した国により文明、文化、言語の影響を受けた。資源を奪われ働かされていた。現代も支配国の影響を受けている。(B)

(2) ドミニカ共和国の日系移住者とのオンライン交流

ドミニカ共和国の日系移住者二世の方に、なぜ両親は日本からドミニカ共和国に移住を決意したのかについて質問し、それぞれの人の移住した背景や思いを知り、考えを深めさせた。戦後貧しかった日本の生活から、遠く離れたドミニカ共和国の地で農業移住することで豊かな生活を手に入れることを期待して移住したなどの回答を得た。そのやり取りを通して、移住には様々な理由があり、大きく分けて、意図した移住(日系人)と意図しない移住(難民等)があることを理解した。

(児童の記載内容)

- ドミニカ人は野菜を食べないから収入にもならないし、自分の野菜を食べて喜んでもらえる人もいないから農業をしたとしても、なんのメリットにもならないので、日高たけしさんのおじいさんやおばあさんはがっかりしただろうなと思いました。(A)(C)
- 日高たけしさんのおじいさんとおばあさんが諦めて日本に帰国していたら、日本の文化はそこまで伝わってきていなかったと思います。今では、ドミニカ共和国に日本語学校があり、日本語や日本の文化を教えているそうです。他にも、日本の料理(味噌・醤油・納豆・梅干し・豆腐 等)や日本のスポーツ(空手・柔道・剣道 等)、よさこい・盆踊り・七夕等も広まっているそうです。また、日本の名前だと、ドミニカ人は良くしてくれるみたいで、ドミニカ人が日本人のことをとても信用してくれていることがよく分かりました。(A)(C)
- 人が移動することで新しいものが生まれることが分かった。日高たけしさんたちが移住してくれたことで日本の文化が広まったと思います。(A)(C)

(3) 高知新聞の記事に関する話し合い

「外国人実習生、共生の道は」という記事で、具体的な内容は、人口減で人手不足が深刻化する日本で、外国人労働者が増えてきている。近年は受け入れ拡大の施策が進み、高知にも2200人超えの技能実習生が訪れ、農業から製造業、サービス業に至るまで幅広い産業の現場を支えている。一方、実習生の処遇や人権を巡って深刻な問題も起きており、多文化共生に向けてどうすればよいのかというものである。日本にきた外国人実習生や無国籍の方と共に暮らすために大切なことについて議論し、共生について考えを深めさせた。(児童の記載内容)

- 共生するには、差別をなくし頑張ってくれた分だけ

日本人と同じように相手を褒める。法律はあっても守らずに解雇し暴力を振るう人がいるから、日本人は外国人実習生が営業に馴染めるようにしていくことが大切。(B)

- 無国籍の人でも結婚でき、旅行できるようにするために、無国籍者用のパスポートや無国籍者用の書類などもつくったらいいと思います。そして、交流のときには説明もしたらもっと仲が深まるのではないかなと思った。(A)(C)

(4) 高知県の国際交流員との交流

高知県の国際交流員(アメリカ合衆国、韓国、シンガポール、ベトナム、台湾出身)との交流の場を設け、移住したときの思いについて質問した。回答の多くは、日本の文化が好きで日本で暮らしてみたかったというものだった。高知県在住の日本好きな外国出身の方々と交流することにより、外国の方を身近に感じるきっかけとなった。

(児童の記載内容)

- 日本の人に、台湾人と言うととても優しくかったということを知った。新聞では外国人に対して差別などがあると書かれているけど、優しくできる人もいるということが分かった。(A)(C)
- 韓国と日本の関係が悪くて移住するのが不安だったようです。でも来てみるとみんな優しくかったということが心に残った。日本に来て困ったことは、市役所で手続きなどを行うときわからなかったようです。(B)

5.3. 人類が目指すべき未来の探究(責任)

(1) 移民問題の探求

アフリカのアンゴラ出身の方をゲストに招き、自国の難民問題について語ってもらう活動を設定し、移民は、戦争・植民地支配に起因する問題があることについて考えを深めさせた。現代社会では、紛争による難民が多数存在しているという事実、およびそれに伴う移民の受け入れに関する課題、日本の移民受け入れの現状について知ることを通して、「共生」に関する考えを深めさせた。また、グローバル化が進む現代社会において国を超えて互いの文化を尊重し、共生社会を実現していくためには何が必要かを考えることを通して、「世界は一人ひとりの行動で変えることができる」といった考えをもつことにつなげていった。その際、具体的にどのような行動が重要になるのかについて、自分なりの考えをもつことができることを目指した。

(児童の記載内容)

- 難民を受け入れている人も難民を理解することは難しいと話していたので、相手を理解することは簡単ではないと思った。(B)

- 相手のことを知り、感謝を伝えたりしていけば助け合いができると思う。(B)
- 今の学校生活で、他人を理解するということは、友達や先生と仲を深め合い、相手のことをよく考えて発言したり、行動したりするということにつながるのではないかと思います。だから、今の友達や先生との関係は、他人を助けるのに必要なことなので、何事にも思いやりを持って取り組みたい。(A)(C)
- ゲストの方が、大切なことは他人を理解することと言っていたので、私ももっと友達の心を理解するべきだなと思った。(A)(C)

(2) 意見文の作成

ユニット全体で扱ってきた様々な課題における考えを振り返りながら、人類が目指すべき未来について「共生」をテーマに考え、それぞれが意見文を作成した。さらに、作成した意見文を共有することを通して、「世界の創造は人類の移動とともにある」というセントラルアイデアに関する理解を深めた。

(児童の記載内容)

- 共生して行くには理解し合うことが大切だと思いました。まず、理解し合うには相手のことを知ったり知ってもらったりすることが大切です。知ってもらったりするにはいろんな人と話すと良いと思います。話すときには相手の意見を尊重し、自分から積極的に話すように心がけると良いと思う。(A)(C)
- 移民の視点、移民を受け入れる側の人の視点の事例から相手のことを理解する努力が大切だと考えた。(A)
- これからは、私の近所にも外国人労働者がいるのであいさつなどをしっかりと仲良くしていきたい。(A)(C)
- 今の学校生活で、他人を理解するということは、友達や先生と仲を深め合い、相手のことをよく考えて発言したり、行動したりするということにつながるのではないかと思います。だから、今の友達や先生との関係は、他人を助けるのに必要なことなので、何事にも思いやりを持って取り組みたい。(A)(C)

6. 考察

各課題において、本研究で焦点をあてた OECD が規定するグローバル・コンピテンスの3つ、「地域的、世界的、そして異文化間の問題を検討する能力」、「他者の視点と世界観を理解し認める能力」、「異なる文化を持つ人々とオープンで適切で効果的な関わりを持つ能力」と関連づけることができる意見が多数記載されていた。また、本単元の最終課題であった意見文には、学習した内容を自分ごととして捉え、普段の自身の行

動を省察していることが伺える意見が多数あった。これらの結果から、IB プログラムにおける教科横断型授業「私たちはどのような場所と時代にいるのか」の実施を通して、グローバル・コンピテンスを育成することが一定程度できたと考える。この理由について考察する。各課題における児童の感想をみると、「人類の移住の背景の探究(原因)」の(3)の課題から、学習内容を自分ごととして捉えていると推察される文章が増えた。次の「人類が目指すべき未来の探究(責任)」の段階になると、アンゴラの難民が題材ではあるが、「今の学校生活で、他人を理解するということは・・・」や「私ももっと友達の心を理解するべきだなと思った。」など、世界の問題を自分の生活に関連付け、自分ごととして考えている。理由として、単元全体を通して本物の情報や事例を教材として準備し、提供したことが挙げられる。ドミニカ共和国の日系移住者にオンラインでつないだり、高知県の国際交流員(アメリカ合衆国・シンガポール・ベトナム・韓国・台湾出身)を招き、移住の背景や想いを語ってもらったり、アンゴラ出身の留学生を招き、自国の難民について戦争・植民地支配に起因する問題を話して頂いた。それらは、教科書や、インターネットには載っていない本物の教材である。当事者にお話を伺い、疑問に思ったことや考えたことを直接質問することが、世界で起きている様々な問題を自分ごととして考えるきっかけとなったといえよう。しかしながら、ドミニカの移民やアンゴラの難民の事例のみでは、児童はそれらを遠い世界の問題として捉えてしまう可能性がある。しかしながら、本物の教材の中には、児童にとって身近である高知県の国際交流員を含め、日本の移民受け入れの現状や来日している外国人労働者に対する不当な扱いなどをテーマとした。そのことが、遠い世界の問題であった移民・難民について実感をもち、世界で起きている問題を自分ごととして捉えることができたと推察される。つまり、グローバルに起こっている社会問題をローカルな事例と結び付けた教材を開発し、それらの両方において本物の情報や事例を提供したことが、問題を自分ごととして捉えることを促進させ、グローバル・コンピテンスの育成にもつながったといえる。

グローバル・コンピテンスを育成させるためには、世界で起きている問題を、「自分ごと」として捉えることが重要である。さらに、それを実現するための教材及び単元構成として、グローバルに起こっている社会問題をローカルな事例と結び付けた教材、かつグローバルおよびローカルの事例の両方において、できる限り本物の情報及び事例を提供することが重要であるといえよう。

7. おわりに

本研究は, IB プログラムの実践におけるグローバル・コンピテンスの涵養に関し, 6年生の授業実践をもとに, 児童のグローバル・コンピテンスの獲得の要因を明らかにした。はじめに, OECD が規定するグローバル・コンピテンズと IB カリキュラムの目的の共通点を抽出して考察した。次に, 抽出した共通点に関連する教材を開発して実施し, 児童のグローバル・コンピテンズの涵養について考察を行った。その結果, 次の二点が明らかとなった。一点目は, IB カリキュラムの目的と OECD が規定するグローバル・コンピテンズには共通点があり, IB カリキュラムを実施することにより, OECD が規定するグローバル・コンピテンズが涵養可能であることである。二点目は, コンピテンズの獲得要因として, 自分ごととして考えられることが重要であることである。さらに, 本物の情報や事例が, それを促進することも示唆された。

グローバル化が進む現代社会において, 国を超えて互いの文化を尊重し, 共生社会を実現するために, グローバル人材の育成が必要不可欠である。多くの研究者および実務者が, IB プログラムによりグローバル人材の育成を促進できることを主張しているが, 具体的な事例研究はまだ乏しい。本研究は一事例に過ぎないが, 今後もこのような事例研究が蓄積され, IB プログラムによるグローバル・コンピテンズの涵養の過程が理論的に明らかにされていくことが期待される。

参考文献

Mansilla, V.B., & Jackson, A. (2011). *Educating for Global Competence: Preparing Our Youth to Engage the World*. CCSSO-Asia Society. (2022年

2月2日参照) : <http://asiasociety.org/files/book-globalcompetence.pdf>

Cushner, K. (2008). International socialization of young people: Obstacles and opportunities. *International Journal of Intercultural Relations*, Vol.32(2), pp.164-173. <https://doi.org/10.1016/j.ijintrel.2007.09.004>

OECD (2018). *Preparing Our Youth for an Inclusive and Sustainable World: the OECD PISA global competence framework*. (2022年2月1日参照) : <https://www.oecd.org/education/Global-competency-for-an-inclusive-world.pdf>

Resnik, J. (2008). The Construction of the Global Worker through International Education, Julia In J. Resnik (Ed.), *The Production of Educational Knowledge in the Global Era* (pp. 145-167), Rotterdam: Sense.

UNESCO (2014). *Global citizenship education: Preparing learners for the challenges of the 21st century*. UNESCO.

国際協力機構 (2014). 『グローバル化時代の国際教育のあり方最終報告書』。(2022年2月1日参照) : https://www.jica.go.jp/hiroba/teacher/report/prmiv10000002sqn-att/comparative_survey02_01.pdf

国際バカロレア機構 (2016). 『PYP のつくり方: 初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み』。(2022年8月31日参照) : <https://www.ibo.org/contentassets/93f68f8b322141c9b113fb3e3fe11659/pyp-making-the-pyp-happen-jp.pdf>

渡邊雅子 (2014). 「国際バカロレアにみるグローバル時代の教育内容と社会化」. 『教育学研究』, Vol.81 (2), pp.176-186. https://doi.org/10.11555/kyoiku.81.2_176